広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	あいづちにみる小学生の言語生態研究 : くりかえしのあいづちを発する意味とその効果について
Author(s)	小林, 照子
Citation	児童の言語生態研究 , 12 : 74 - 82
Issue Date	1985-05-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045139
Right	
Relation	

◆自由寄稿◆

あいづちにみる小学生の言語生態研究

くりかえしのあいづちを発する意味とその効果について

●小林照子

1　研究の目的

本研究は小学生の発話の動機を探る一つの試みである。談話を進行させているエネルギーは発話者の情動に他ならない。談話は情動が共鳴しあうことによって進行するのであって、共鳴が起こらない場合にはそこで止まってしまう。話し手が聞き手の情動に働きかけ、共鳴を呼び起こそうと努力する様が、発話の文末にはっきり表われていることからも、話し手から発する聞き手への働きかけと、聞き手から発する話し手への共鳴反応のやりとりが談話を進行させているといえる。よって談話においては話し手と聞き手の情動がぶつかりあうところに発話の動機があると考えられる。その動機を探るためにはあいづちに注目しなければならなかった。どのようなあいづちが打たれるかによって談話の展開は変っていく。すなわち発話者の情動の流れが変わっていくのである。

すでに『あいづちにみる小学生の談話行動とその発達に関する研究』（昭和57年・兵庫教育大学学校教育専攻科修士論文）で、あいづちにみられる共鳴反応を17のパターンに類別し、それぞれの特徴を明らかにすることはできた。今回はさらに新たな分析として、聞き手から発する話し手への共鳴反応にみられる「くりかえしのあいづち」を拾い出した。発話者はどのような気分が流れている時に「くりかえしのあいづち」を発するのか。すなわち本研究は談話の中で発話者が「くりかえしのあいづち」を発する意味とその効果について考察を試みようとするものである。

2　調査の方法

子ども同士の自由な談話を生のまま採集するために、昭和57年5月から7月までの間、東京都町田市立南第四小学校において一つの調査を試みた。調査というのは、同学年同学級同性の3人グループを作り、小教室の中で単純な手作業をさせ、作業中3人がどのような談話を展開するのか隠し録音するといったものである。隠し録音は1年生から6年生まで、各学年男女別に作った3人ずつのグループを、各グループごと個別に行った。

1グループの人数を3人にしたのは、「子どもの緊張を少なくするため」「談話が2つに分かれて同時進行することを防ぐため」「楽しくはずんだ気分で作業を進めるため」といった理由による。そして、3人グループのメンバーを選ぶ条件としては「学習成績は学級平均かそれ以上の児童であること。」「言語活動が

活発な児童であること。」「仲良し同士の児童であること。」を掲げ、グループ作りを各学級担任に依頼した。

調査の際、各学級担任に調査の全内容を説明したうえで、子どもには一切を語らないことを守ってもらった。子どもたちはただ単に「先生に頼まれてお伝いをする。」ということで、調査者に引き合わされ、教室内での作業を命じられたわけである。作業というのは、1.5㎝幅22本の紙テープを重ね合わせて、1本の蛇腹状のひもを作ることである。調査者は3人の児童が作り方を覚えたことを確認したうえで、「先生は職員室に行ってくるから3人だけでやっててね。しばらくしたら迎えにくるからそれまでは3人で仲良く作っているんですよ。教室の外に出たり、あばれたりしてはだめだけど、おしゃべりするのは自由です。がんばってね。」いった指示を与えて、実験室の外に出た。

こうして調査者が迎えに行くまでの約30分間に、子どもたちから発した談話をすべて本棚に隠しておいた小型カセットテープに録音したわけである。今回の調査で、一年生から六年生の各学年2学級から男女各1グループの談話を録音したので、合計24グループの談話録音資料が得られた。単純な手作業によって、身体運動を制約された子どもたちは、例外なく、彼らの情動のはけ口を、発声、発話に求めていた。子どもたちにとって、日頃から仲良しの自分達が担任教師から選ばれ、3人だけで小教室内に入るということは、それだけでも心はずむことだったらしい。そのことは、彼らが実験室で作業する間、盛んに発していた発話の内容からも、十分に推察することができる。幸いなことに、彼らにとっては密室の談話ともいえる、作業中の自由な談話を録音することにほぼ成功した。

3　小学生のあいづち17のパターン

テクスト1からテクスト23は今回の調査で得た録音テープを以下に示す①から⑭の記号を用いて、談話テクスト化したものである。

① 録音した小学生の談話を記号化するにあたって、カタカナを音声符号として用いた。

② 音声符号化するにあたっては、「話部」を単位に分かち書きした。

③ すべての文の文頭に、通し番号をつけた。

④ ――線筒所は、両者の発話が重なる部分。

⑤ ……線筒所は、聴き取りが不明な部分。

⑥ 〜〜線筒所は、笑いながら発話している部分。

⑦ ----線筒所は、メロディーに乗せて歌っているか、メロディーに乗せて発話している部分。

⑧ 言いよどみ、言い誤りの筒所は△印で示した。

⑨ 発話の最中、他の話者からの発声、発話によって、発話を中断された筒所は△印で示した。

⑩ 文全体が強く発話されている筒所は、文頭をf印で示した。

⑪ 上がり、下がりの抑揚がはっきり聴き取れる筒所は、↗印と↘印で示した。

⑫ 特に強いアクセントとして聴き取れる筒所は、「アレワ　ヨー」と「ー」で示した。

⑬ 笑いの筒所は、音声符号に置き換えず、「笑い」で示した。

⑭ 一人の長い発話の間に、他の発話者から発せられるあいづちは、()で示した。

テクスト20は5年生の女子3人の談話である。Y、E、Tの3人が、話し手と聞き手の構えを交替しながら、次から次へと談話が展開している。太字の語句が、本研究で取り上げたあいづちである。一般にあいづちと言えば、テクスト20にある、「(189)ウン」「(191)ソーソー」「(198)ウン」などのように、話し手の話が続く際に、聞き手が打つあいの手といったものを指す。ところが小学生の談話を見ているとそういったもの以外にも、談話が展開して行くために欠くことのできない働きをしていると認めざるを得ないものが多いことに気付く。

テクスト20ではとくに、「(192)アタシ　ネー　アタシ　ネー」「(196)デ」「(199)デ」「(203)アノ　ネー」の働きに注目したい。発話者Yは、聞き手の構えであるあいづちを打っているのではなく、あいづちを打つことによって、聞き手から話し手に交替しているのである。すなわち、ここでのあいづちは、リレーでいう「バトン」の役割を果しているということができる。

小学生の談話を聞いていて、子どもらしいと感じるのは、「速口なこと」「声が大きいこと」「声が重なるところ（二人が一度に話しているために声が重なってしまう）が多いこと」「発言権の奪い合いがはげしいこと」が大きな原因であるということに気付いたのも、小学生の談話テープを、このような談話テクストに起こす作業を通してであった。そして今回掲げたテクストに太字で書いたものは、どれも談話の展開に欠かせないものばかりである。そこで本研究では、あいづちとして「発話の最初に発した語、句、文で、話者の聞き手に対する構えが明らかに認められるもの」3

892例を抽出し、その一つ一つの働きを考察した。

テクストに太字で書いたあいづちは、どれも発話者たちの情動のぶつかりあいによって生じたものばかりである。テクスト20を見ても、あいづちは発話者たちの情動がぶつかりあう際に響く音声だと言うことができる。本研究ではその響きを共鳴反応と呼ぶことにした。『あいづちにみる小学生の談話行動とその発達に関する研究』では、一つ一つの共鳴反応を分析し、その個別的共鳴反応に17の種類があること、共鳴の流動パターンに5つの型式があること、そしてそのどちらにも学年発達が見られることが確かめられた。表1に示したのが個別的共鳴反応の17種類、表2に示したのが共鳴の流動パターンの5型式である。

4　くりかえしの意味の効果

今までに述べた研究を基に、今回は新たな視点からの研究としてくりかえしのあいづちを発する意味とその効果についての分析と考察を試みた。テクスト20に見られる「(191)ソーソー」「(190)アタシ　ネー　アタシ　ネー　アタシ　ネ」「(214)ヤダーッ　ヤダ　ナー。」のように、反復形式をとるあいづちを、くりかえしのあいづちと呼び、今回の研究対象とした。前回の研究では、「(190)ダカラ」も「(192)アタシ　ネー　アタシ　ネー　アタシ　ネ」も、累加の共鳴反応として一まとめにしていたが、今回は反復しているか否かで区別し、発話者Yは、(192)でなぜ「アタシ　ネー」を3回もくりかえさなければならなかったのか、ということを考察しようとしたわけである。

あいづちの定義にあてはまる3892例の中から、

テクスト20（5年生女子②）

M(188)イセッテ　イ　イセッテ　スゴイ　ヨーキナ　カオ　シテン　ジャン↗→

〔○〕Y(189)**ウン。**

〔ω〕M(190)**ダカラ**　タノシソーダ　ナート　オモッタ　ノ▷　→

〔♡〕E(191)**ソーソー　ソレワ　アル。**

〔ω〕Y(192)**アタシ　ネー　アタシ　ネー　アタシ　ネ**　イッショ　ガクゲーカイノ　トキ　イッショダッタ　ジャン。(193)オジーサント　オバーサン。→

〔ᴗ〕M(194)**笑。**

〔ᴗ〕E(195)**笑。**

〔ω〕Y(196)**デ**　イッショダッタ　ワケ　ネ。(197)アノヒト　ト。→

〔OK〕M(198)**ウン。**

〔ω〕Y(199)**デ**　スッゴク　アノコ　ネーェ↗　アノコ　ダッテ。→

〔ᴗ♡〕M(200)**笑。**(201)**ヤダーン。**(202)**笑。**

〔ω〕Y(203)**アノ　ネー**　ナンダッケ。(204)ホイデ　ネー　ハジメ　キンチョースン　ジャン。(205)ソレオ　ホグス　タメニ　ネ　アッチムイテホイ　ヤローナンツッテ　→

〔♡〕F(206)**ウー。**

Y(205)ヨーチナノ　スッゴク　ヨーチナノ。→

E(207)フタリデ　ヤッタ　ノー↗。(208)ジャンケンポイ　アッチムイテホイ。？　(209)笑。

〔ᴗ〕M(210)**笑。**

Y(211)ヤメヨー。(212)ヤメヨ。(213)カミサマニ　イノローナンテ。→

〔♡〕E(214)**ヤダーッ。**(215)**ヤダ　ナー。**

〔ᴗ♡〕M(216)**笑。**(217)**ネー。**

Y(218)ウッウッウーンッテ　ネ。(219)ウウウウウーダー。(220)モー。(221)笑　→

〔←→〕E(222)**ウソ。**(223)ソンナコトマデ　シタノーォ↗。

〔○〕Y(224)**ヤッタ　ノ。**(225)**ホントニ。**

(188)	(189)	(190)	(191)	(192)(193)	(194)	(195)	(196・7)	(198)	(199)	(200・1・2)
M	Y	M	E	Y	M	E	Y	M	Y	M
→	○	→	♡	ω→	ᴗ	ᴗ	ω→	OK	ω→	ᴗ♡
(203・4・5)	(206)	(205)	(207・8・9)	(210)	(211・2・3)	(214・5)	(216・7)	(218・9・220・1)	(222・3)	(224・5)
Y	E	Y	E	M	Y	E	M	Y	E	Y
ω→	♡	♡→	? ᴗ	ᴗ	→	♡	ᴗ♡	→ᴗ	↔ ?	○

今回抽出できたくりかえしのあいづちは95例であった。この95例を、それぞれの談話の展開の中で細く分析することによって、発話者がくりかえしのあいづちを打った意味と、その後の談話の展開に働きかけた、くりかえしのあいづちの効果について考察した。

79ページのテクスト17は5年生の男子の談話である。これは「(259)イツ　マナベク　タンジョービ。」という、Oの質問から始まった談話でありながら、Zの「(260)キノー　オワッタ　ノー。」を受けて、Uが「(261)オワッタ　ノー。」とくりかえした時点で、OはZとUの2人に排斥されてしまったという例である。その後、Zの「(264)オワッタ　ヨナー。」から、ZとUはまなべ君の誕生会という2人の共通経験について談話し続けている。その間、Oは笑って反応することはあっても、とうとうこの話題が終るまで、話し手になることはなかった。

同ページのテクスト7は2年生女子の談話である。この例には、Yの「(161)イー　ネー。」を受けた、Nの「(162)イー　ネー。(163)イー　ネー。」、Nの「(170)サクブン　トリヤメダ　モン。」を受けた、Yの「(171)トリヤメダモン。」といった、くりかえしのあいづちが見られる。YとNは、お互いにそれぞれの主張に賛成の意を表わしているのだが、2人が共鳴し合えばし合うほど、YとNの主張に賛成しきれないKは、この2人

表1．あいづちの個別的共鳴反応17種類

	記号	名称	性質
A	OK	了解	他の話者からの訴えかけを、そのまま聞きとめた時に発する。
	○	肯定	他の話者からの訴えかけを、肯定したり、正しいと判断した時に発する。
	◎	同意	他の話者からの訴えかけに、同意、賛成した時に発する。納得も含む。
C	?	疑問	話者が疑問を感じたり、あいまいではっきりわからない時に発する。半信半疑で発する。
B	≠	否定	他の話者からの訴えかけを、否定、否認する時に発する。
	↔	反発	他の話者からの訴えかけに反発、反対した時、不一致の時に発する。反戻も含む。
D	⊚	累加	他の話者、又は自分が発した発話に、さらに重ね加えようとして発する。類推も含む。
	↺	解迮	話者が急に思いあたったり、思いがけなく、内在していた自分の意識に出あった時に発する。
	⋀⋀	誘引	なぜだかわからないが、そう感じるといった時に発する。予感も含む。
E	＜	強調	他の話者、又は自分が発した発話を、強調、拡大しようとした時に発する。
	⇨	呼びかけ	他の話者からの注意を集めようとした時に発する。話し手としての自分を認めてもらおうとした時に発する。
	▽	評価	他の話者の発話に自分なりの評価を表わそうとした時に発する。
	⚖	決意	話者が自らの態度を決定した時に発する。
F	♡	感情	話者が自らの感情をゆり動かした時に発する。共感、感動の他に、快感、不快感の両者を含む。
	!	驚き	話者が、瞬発的に強く驚いた時に発する。
G	☺	笑い	大笑い、ごまかし笑い、冷やかし笑い、薄笑い、爆笑など、声を伴って発した笑いすべてを含む。
H	♬	歌	鼻うた、はやしうた、小学生の流行歌など、メロディーに乗せて発した歌すべてを含む。

に排斥された形になっている。

以上のように、くりかえしのあいづちを打つことによって、2人で1人を排斥しているものを、『排斥型』と名付けた。今回拾い出したくりかえしのあいづちでは、この排斥型に当るものが一番多く、95例中の37例だった。

81ページのテクスト23には、排斥型とは違う意味と効果をもつ、くりかえしのあいづちが見られる。Kの「(189)ウンウンウンウンウンウン。」が、それで、こういったものには『終止型』と名付けた。

Kの「(90)ヨシミッテ　アノ　ダレガ　スキッテクンチャンガ　イッタンダケドー（M(91)ウン。）オモシロイナーッ　ッッタ　ノネ。」という発話に刺激されたMが、次から次へとKを問いただすので、さすがのKもあわてている。「(182)ウン」と、了解の共鳴反応を示しても、再に、「(184)シラナイ　アタシ。」と、肯定の共鳴反応を示しても、もう一度「(187)ウン。」と、了解の共鳴反応を示してもMの気持ちはおさまらない。とうとうKはMの興奮をおさえる最後の手段として、「(187)ウンウンウンウンウンウン。」と、「ウン」を6回もくりかえしたといえるのではないか。そこでこの例のように、くりかえしのあいづちが終止の合図といった役割を果しているものを『終止型』と名付けたのである。この『終止型』に当る例は、95例中の11例であった。『終止型』のように、終止の合図としての役割を果しているものとは反対に、くりかえしのあいづちが、話し手の情動に迫車をかける『はやしことば』の役割をしている例があった。テクスト20の談話に見られる、Yの「(46)オシエテ　オシエテ。」がそれに当たる。このような例を『はやし型』と名付けた。

80ページ、テクスト20の談話は、今まで秘密にしていた異性の名前を公表することで、乗りに乗っている。3人の中でも、談話の展開をリードしているY深い。75ページに、何度もくりかえしのあいづちが見られる点も興味でとりあげたテクスト20も、同じグループの談話である。

75ページのテクスト20でも、Yが談話の展開に積極的に働きかけているのがよくわかる。Mが「(190)ダカラ　タノシソーダ　ナート　オモッタ　ノ。」と、言ったのを、Eが「(191)ソーソー　ソレワ　アル。」とはやしている。これはMにとって「もっと続きを話してほしい。」という催促になっている。ところが、それを抑えてYが「(192)アタシ　ネー　アタシ　ネー　アタシ　ネ」と、発言権を奪ってしまった。ここで発したくりかえしのあいづちは、Yが自分で自分をはやして

表2．あいづちに見る共鳴の流動パターン

	共鳴の流動パターン	内　　容
1	→OK→OK→OK　（→了解）	聞き手の立場にある発話者が、聞き手の構えを保持したままの状態で、くりかえし「OK・了解」の共鳴反応を発するもの。
2	→◎→◎→◎　（→累加）	累加の共鳴反応が次から次へと伴発されるもの。「自分が発した発話に累加しようとするもの」「他の発話者が発した発話に累加しようとするもの」がある。
3	？○○？○○　（？肯定）	1人の発話者の問いかけに他の2人の発話者が答えるということのくりかえしが続くもの。
4	◎◎◎　（同　意）	1人の発話に、他の2人が同意の共鳴反応をくりかえすもの。
5	♡☺✓　（感情・笑い・驚き）	感情、笑い、驚きの共鳴反応が次から次へと併発されるパターン。すなわち、発話者たちが、話し手の立場と聞き手の立場との交替をくりかえしながら、3人そろって興奮のうずを巻き起こすといったもの。

発話にはずみをつけ、発言権を獲得するといった働きをしている。Eが「(191) ソーソー　ソレワ　アル。」と、Mにあいづちをうった時点では、この後、Mが話し手になるのが自然であるし、Mもあいづちに続く発話を用意していたはずである。そこまで予定されていた、談話の展開を変えるには、どうしても「アタシネー」を3回くりかえさなければならなかったのではないだろうか。この談話では、その後もすっかりYが話し手となり、MとEは聞き手となって、Yの話に共鳴することを楽しんでいる。このような『はやし型』は95例中20例であった。

表3は今回抽出したくりかえしのあいづちの学年分布を示したものである。今までに述べたものでは、『排斥型』が37、『はやし型』が20、『終止型』が11となっている。その他の19例から、くりかえしの意味と効果が明確に認められる「型」を見つけ出すのは、今後の課題となるが、数少ない例の中には、「開き直りを顕示する」「話し手からの問いかけをはぐらかす」「話し手の気持ちをなだめようとする」といった効果を持つものがあった。

95例のうち『排斥型』が37例だったということは、今回録音した談話が、どれも3人グループの談話だったということによると考えられる。談話の楽しさは、発話者が話し手の構えと聞き手の構えを交替させながら、お互いの情動を共鳴しあうことの実感にある。一人の発話者が発言しても、他の2人から、何の共鳴反応も得られない時に、談話は生まれない。一人の発話が、他の1人、又は2人の共鳴反応を得ることによってはじめて、談話は生まれる。3人がお互いの情動を共鳴しあうといっても、1人1人の情動の高まりには違いがあるため、談話を展開する際に、3人が3分の1ずつ発話するということはありえない。3人の力がアンバランスにかみあいながら、それぞれの情動に働きかけることによって、2人の談話とは全く違った展開になるのが、3人の談話のおもしろさだと言えるであろう。今回抽出したくりかえしのあいづちの中で一番多く見られた『排斥型』も、1人がにくらしいから排斥したのではなく、3人で情動を共鳴し合う際のパターンとして、「1対2」の共鳴を楽しもうとしたからだと、考えることができる。

また、『排斥型』が1年生に一番多かったということについては、今まで述べてきた考察とは別に、1年生の発達的特徴の一つとして考えてみたいと思う。

81ページのテクスト3は1年生女子の談話である。N2「(123)アキガ　カエル。」を受けた、Yの「(124)アキガ　カエルー。」や、Mの「(128)イッチャッター。」を受けた、Yの「(129) イッチャッター。」、さらに、N「(131)泣」から、YMYNYNと続く「泣」に注目したい。これから意図的な効果を見つけようとするのは難しい。くりかえすことによって何かの効果をねらうというよりは、くりかえすこと自体を楽しんでいるように思われる。このように、意味のないくりかえし、意図的な効果の見られないくりかえしの見られるあいづちを、『連鎖反応型』と名付けた。そして、この『連鎖反応型』は一年生にしか見られなかった。

一年生に『排斥型』が多く、他の学年には見られない『連鎖反応型』が見られたということは、注目に値する。すなわち、このことから一年生段階では、くりかえしのあいづちを意図的に用いて談話をコントロールするということよりも、自分の発声によって、自分が、自分以外の人間と共鳴しあえるかどうかということの方が重大な問題だと考えることができる。

それにひきかえ、『はやし型』が5年生で一番多く見られたということは、高学年になると、談話の展開をコントロールすることによって、情動を共鳴しあうことを楽しむことができるようになる、という考察に行きつくことができる。テクスト20はその代表的な例で、お互いに刺激されたいところを知っていて、そこを刺激しあうことを楽しんでいることがよくわかる。

○本研究は、昭和49年10月25日に開かれた、第67回全国大学国語教育学会にて口答発表した際の原稿を、書き改めたものである。

（八王子六小教諭）

表3　くりかえしのあいづちの学年分布

	1	2	3	4	5	6(年)	計
排斥型	14	8	1	3	9	2	37
はやし型	2	3	1	2	12	0	20
終止型	1	1	3	1	2	3	11
連鎖反応型	6	0	0	0	0	0	6
その他	3	7	4	3	2	0	19
計	26	19	9	9	25	5	95

ガクダ　ヨ↗。　→

〔○〕Y(168)**ソーダ**　ヨ。

N(169)サクブ　ントリヤメダ　モン。　→

〔○〕Y(170)**トリヤメダ　モン**。(171)ヤッタ。

(172)サクブン　トリヤメ↗。　→

(173)ウレシー。

テクスト7では，お互いの主張を同意しあうNとYが，2人の主張に疑いをかけたKを排斥している。

テクスト17（5年男子）

O(259)イツ　マナベノ　タンジョービ。　?

Z(260)キノー　オワッタ　ノー。　→

〔○〕U(261)**オワッタノ**。

O(262)キノー↗。　?

〔○〕U(263)**ウン**。

Z(264)オワッタ　ヨナー↗。　→

U(265)ゴガツダ　ヨ。(266)ゴガツ　ナンナンニチ　カナ。(267)ジューナンニチ　カナ。　→

Z(268)ボク　モー。(269)笑。(270)ウメナンカ　タンジョービ　シラナイデ　キテン　ノヨー。　→

〔◡〕(271)**笑**。

U(272)アソンデタラ　ヨー　タンジョービナン　ツッテ。(273)ダカラ　プレゼントナンカ　アゲナカッタ。

(274)マーチャン　カワイソーダ　ヨネー。

〔♀〕Z(275)**ナンデ**↗。

U(276)ダッテ　ヨー　モラエナインダモン。(277)プレゼント　イケナインダ　ヨ。　→

Z(278)ナンデ　モラエナイ　ノー。　?

U(279)ダッテ　オバサンガ　ネー　プレゼントワ　アゲチャ　イケマセンッテイッタ　ノ。　→

〔G〕Z(280)**ナッ**。

U(281)ナーン　ナンダッ　ツーンダ　ヨ。?

Z(282)ダカラ　ヤダ　ヨ。(283)サイシューテキニ　ケーキ　クワナカッタモン。　→

テクスト17では，Uが(261)でZの(260)をくりかえして，「オワッタノ。」とあいづちをうっている。そのときからOはUとZの2人に排斥されてしまった。Oは(271)で笑いの反応を示してはいるが，まなべ君の誕生日についての談話が終るまでは1度も話し手になることができなかった。

〈排斥型〉

くりかえしのあいづを用いることによって，2人だけの共鳴を顕示し，1人を排斥する型。

テクスト2（1年男子）

Df(132)ナンダ　アリャ。(133)タツヤノホーガ　サーァ↗マシ　ジャンカ。→

〔◎〕Y(134)**ウン**。(135)タツヤッテ　イー　ナマエダ　ヨナ↗。　→

〔◎〕D(136)**ナー**。

Y(137)セツコモ　イー　ナマエダ　ナー→

D(138)ムネ　ウチンチ　ネーェ　ネーェ

▷

N(139)エート　ネー　タツヤッテ　ネー　ウチンチノ　ウラニ　イルンダ　ヨ。　→

〔♀〕D(140)**ウソ　ホント**↗。　?

〔○〕N(141)**ホント**。

Y(142)ウソ　ホントー　ダッテ。(143)ダイジン。　→

〔◡〕D(144)**笑**。

DがY(135)の文末詞を(136)でそのまま「ナー。」とくりかえしている。ここでは，DとYが2人で共鳴しあうことを楽しみ，Nを排斥している。

テクスト7（2年女子）

Y(142)**アー**　ハジマル。(143)ヤッター。→

N(144)キッチン。(145)笑。(146)イーネー。(147)デモハジマッテ。

(148)ハヤク　オワレ　サンスーナンカ　オワレ　オワレー。　→

〔◎〕Y(149)**ホントダ，ホントダー**。

K(150)サンスーナンカ　オワレー。(151)キョーコタチガ　サンスー　オワッタラ　イクンダカラ。　→

N(152)ソシタラ　シャカイダ　ヨー。　→

〔♡〕Y(153)**ガーン**。

N(154)ソシタラ　シャカイモ　オワッテ→

〔OK〕K(155)**ウン**。(156)デモ　ドー　カナ。　?

N(157)オンガク　ニナッタラ　ドースル↗。(158)オンガク　イー　ネー

(160)笑。

〔◎〕Y(161)**イーネー**。

〔◎〕N(162)**イーネー　イーネー**。

Y(163)マタ　アノ　オドリダッタリ。

(164)オンガク。　→

K(165)オンガクジャ　ナイデショー↗。　?

〔≒〕N(166)**オンガク**。(167)ヨジカンメ　オン

〔⇨〕Y (37)**ネー**　イモチャンノ　スキナ　ヒト　シッテルー↗。　?

〔←→〕E (38)**バカ**。(39)ユーナ　ヨー。(40)笑→

〔≒〕Y (41)**イー　ジャン**。(42)**マー　イージャ　ナイ　カ**。→

M (43)アイツ　シッテル　ヨ。(44)アタシ。(45)ダケド　モー　ヤメカッツッテタ　モン。→

〔＜〕Y (46)**オシエテ　オシエテ**。

〔キ〕M (47)**オシエナイ**(48)ダケド▷

Y (40)アタシノ　スキナ　ヒト　オシエテ　アゲルカラ。→

イモチャンの好きな人の名を聞き出そうと，Yがさかんにくりかえしのあいづちを発している。

〈終止形〉

くりかえしのあいづちを発することにより，話し手の発話が，それ以上続くことにストップをかける型。

テクスト15（4年女子）

M (40)デモ　アタシ　アメノ　ドーグナラー↗マンガ　モッテキタイケドー↗　マイニチ　モッテキテ　イーンダ　ヨネー。→

〔○〕H (41)**ソーソーソーソー**。

M (42)ハレノ　ヒデモ　ネー。*f*(43)アタシ　アメノ　ヒナラ　ベツニネー　シズカニ　ネー　ヨメルカライート　オモウケドー↗。→

〔OK〕H (44)**ウン**。

M (45)ニクミク　アー　ユー　ホラ　ベンキョーチューニ　ヨンデタラモー　トリアゲッテ　ユーノガアルカラー↗→

〔OK〕H (46)**ウン**。

M (45)イーケド　ネー↗。→

〔OK〕H (47)**ウン**。

M (48)デモ　タカヤセンセーノ　クミクラスナンテ　サーア↗　トリアゲトカ　ナイッテ　イッテタ　ヨ。→

〔OK〕M (49)**ウーン**。

M (50)ネー↗。(51)センセーガ　チャント　キマッテレバ↗イート　オモウケド　ネ↗。→

〔OK〕H (52)**ウン**。

M (53)ウント　キメテナカッタラ　オンナジダト　オモウ　ヨ。

〈はやし型〉

くりかえしのあいづちを発することにより，勢いよく自分が話し手になったり，自分は聞き手の立場で，話し手をけしかけ，話し手が話し続けることを催促する型。

テクスト20（5年女子）

M(226)ユモチャン　ネー　ユモチャン　コナイダ　ノ　カエリ　ネー　スゴカッタ　ノ。→

〔♀〕Y(227)**ナニ**。

M(228)タマリチャンナンテ　デテキタ。(229)笑。→

〔♂〕Y(230)**エーツ，エーツ**。

M(231)タマリッテ　ユオート　シタンダッテ　ネ。(233)シタラ　タマリチャンナンテ　ユッテ。

〔♡〕E*f*(234)**ヤダーン**。

M(235)スゴク　キモチ　ワルインダ　モン。→

Yが聞き手の立場から，Mをけしかけている。

テクスト19（5年女子）

N (94)アタシノダッテ　コレ　ウマイデショー。

(95)ホラミンナー。

(96)ミジカイケドー。→

〔▽〕O (97)**ヘタッピ　ヘタッピ　ヘタッピ**。

N (98)ミンナ　ナガイデショー。(99)アレッ。(100)笑。→

〔☺〕O(101)**笑**。

N(102)キレーデショ。→

〔O〕H(103)**ウン**。(104)**マーネ**。

〔▽〕O(105)**ミジカイ　ミジカイ**。

Hf(109)センス　イー　ヨー。(110)センス　ワルイケド　クリスマスミタイ。(111)笑。

〔◎〕N(11)**ア　ホント**。(113)クリスマスミタイ。(114)チャンチャーン。→

自分の作品をほめてもらおうと呼びかけたNに，Oは「ヘタッピ　ヘタッピ　ヘタッピ」と，悪い評価のあいづちをくりかえすことにより，Nの感情を逆なでし，Nの発応を期待して，Nからの発話を催促している。

テクスト20（5女）

〔⇨〕Y (35)**ネーネーネーネー**　イモチャンノ　スキナ　ヒト。

E (36)チガウ　ノネ。

Mのはしゃぎように戸惑い気味のK。Mの気がすむように，何度もあいづちをうつのだが，Mはなかなか納得しない。最後の手段として，「もうよくわかっているから，これ以上しつこく言わないでよ。」と言っているかのようにもとれる，Kの「ウン　ウン　ウン　ウン　ウン　ウン。」である。

〈連鎖反応型〉

くりかえしのあいづちを発することによって何かの効果をねらうというよりも，くりかえすこと自体を楽しんでいる型。

テクスト3（1年女子）

M(118)アー。(119)ナンカ　ココロ▷
Nf(120)アッ。(121)アキガ　カエルー。
〔♀〕Y(122)**エッ**。
N(123)アキガ　カエル。
〔◎〕Yf(124)**アキガ　カエルー**。
〔♀〕M(125)ドコー。
N(126)アソコ。
〔♀〕M(127)ドコー。
N(128)イッチャッター。
〔◎〕Y(129)**イッチャッター**。
N(130)アキガ　カテッテッター。(131)泣。
〔♡〕Y(132)泣。
〔♡〕M(133)泣。
〔♡〕Y(134)泣。
〔♡〕N(135)泣。
〔♡〕Y(136)泣。
〔♡〕M(137)泣。
Nf(138)マサカ　ノンチャンマデ　カエッチャウトワ。

テクスト1（1年男子）

I (20)ミンナ　ソトィ　デテル　カナー。(21)アラッ↗。(22)ヤスミジカンナノニ　デテ　ナイ。(23)笑。
〔☺〕K (24)笑。
〔☺〕M (25)笑。
I (26)アラ　ナンテ。(27)笑。
M (28)エーッ。
If (29)アラッ。(30)笑。
〔☺〕M (31)笑。
〔☺〕K (32)笑。
I (33)ボケチャッタ　ヨ。
〔◎〕M (34)ボケチャッタ　ヨ。(35)笑。
〔☺〕I (36)笑。
〔☺〕K (37)笑。
〔OK〕H (54)**ウン**。(55)アー　ハジメチャンノコエ。

Mの発話にストップをかけようと，Hが(41)で「ソーソーソーソー。」と，くりかえしのあいづちを発している。ところがMはそれを解さず，その後も一方的に話し続けている。(46)(47)(49)とHが発している，了解のあいづち「ウン」は，空返事にすぎない。

テクスト23（6年女子）

E(158)マリ　クミタテヤク　ネ↗。
〔OK〕M(159)**イーヨ**。(160)*f*ナンデ　アタシガ　オモシロイ　ノー。　?
〔○〕E(161)**オモシロイジャ　ナイ**。
〔♀〕M(162)**エッ**　キヨコト　クニオダケ　イタ　トキデショー↗。(163)オモシロイ　ナーッテ　イッタ　ノー↗。?
〔○〕K(164)**ウン**。(165)オカーサン　イナイ▷
〔◎〕M(166)デ　キヨコワ　ドーユーフーニ　ユッタ　ノー↗。　?
〔♀〕K(197)**アタシ**↗。(168)デ　ジャア　スキナ　ノーッ↗　ツッタ　ノ。　⟶
〔♀〕M*f*(169)**エッ　ダレガ**。(170)サイショニ　ナンツッタ　ノ。　?
〔◎〕K(171)**ダカラ　ネ**　クニオト　ゴハン　タベテル　トキニ　ネ▷
E(172)コーフン　シテンノ　マリ。(173)笑。
〔☺〕K(174)笑。
〔⇨〕M(175)*f***テメー**。(176)ソーユー　コト　ユッタラ　ブッコロス　ヨー　エミー。　⟶
〔☺〕K(177)笑。
〔☺〕E(178)笑。
M(179)ベツニ　コーフン　シテナイ　ヨーォ。(180)ダッテ　アタシノ　スキナ　ヒトワー。(181)デモ　クニチャンニ　ユワナイデ　ネ↗。
〔OK〕K(182)**ウン**。
M(183)キヨコ　シラナイケド。
〔○〕K(184)**シラナイ　アタシ**。
M(185)*f*スキナ　ヒト　クニオトカ　サー。(186)ソーユーノ　アタシ
〔OK〕K(187)**ウン**。
M(186)カンケーナイカラー↗　モ。(188)ネ。
〔OK〕K(189)**ウン　ウン　ウン　ウン　ウン　ウン**。